

## クリニカルパスが拡げる薬剤師の可能性

### Possibility of the pharmacist which a clinical path enlarges

依田 啓司<sup>1</sup>, 佐藤 博<sup>2</sup>(<sup>1</sup>国際親善総合病院,<sup>2</sup>新潟大学医歯学総合病院)

クリニカルパス（以下パス）は、医療の質と効率を確保する管理ツールとして医療界に瞬く間に普及した。しかし、その中で薬剤師が必要不可欠な存在として参画している施設はまだ少ないように見える。パスにおいて薬剤師は、科学的根拠に基づいた薬物治療や用法用量の設定、また治療効果や副作用評価のための患者モニタリング項目の設定とその評価時期の決定、すなわち薬物の体内動態の特徴を把握し、体内動態的な視点から重要な副作用の発現時期を予測したり、その対策や代替薬などの提言が出来る資質が求められている。またベッドサイドにおける服薬指導を通して、薬物治療の効果と副作用の未然防止、さらには安全管理をも担っている。このようにパスを通して臨床現場における薬剤師の求められている役割は大きく拡がってきており、臨床対応能力が強く求められている。パスに深く参画するには薬剤師が薬物治療にどれだけ実質的に関与できるかが、それを決定する主要な要因であろう。これらについて実際にパスを通して活躍している医師、看護師、薬剤師から、背景にある大きな医療変革の流れを踏まえて発言をお願いしている。薬学教育6年制にあたり、実際に薬物治療の責任の一端を担える薬剤師を養成するには、どのような教育が必要かも見えてくるものと思う。